

# 手記

## 体験記

北海道 今村 栄 三

出生から入隊まで

大正四（一九一五）年二月十一日、根室市千島町、父今村栄松、母千枝の四男四女の三男として生まれる。大正十一年四月一日、町立花咲尋常高等小学校に入學、昭和四（一九二九）年三月高等科二年同校を卒業、家の手伝い。

春の流水海明けを待つて鱈漁カレイに始まり、五月初旬から七月末まで鮭鱒流し網漁サケマス。八月から十一月まで帆立貝ケンピリガイの大漁で安値になる前に大解オホトク、

アイナメ釣り漁に他の船より先に切りかえする等の繰り返しが一年の生計であり、船の装備も他の船より優れており、乗組員も二人は多い。漁にも恵まれ暮らしは楽だった。また、父は夕食時は乗組員と食卓を一緒にして話し合いながら一杯をとにもする。酒は台所に四斗樽を備え付け、沖の時化しげの場合、船の機器の整備が無い折は、朝からでも酒を飲んで良いと言い、好みの料理を母に作らせていたので、四年から七年と連続して遠くは秋田県から来られた人もおられた。兄が船長、二男が機関士、私は新米で甲板員で見習いだった。

昭和六年九月六日朝、国後島（現在北方四島）に帆立貝漁に出漁操業中、二男勇、海中転落、潮の流れ速く、溺死し、行方不明となり、三十五日目に葬式を行

う。その後私が機関士となる。

昭和十年五月初め徴兵検査を受ける。当時根室支庁管内根室町外別海村、標津村、中標津村、羅臼村の外、齒舞群島、色丹島、国後島、択捉島までで三百二十五人ほどの中から二十七人が甲種合格した。

七月中旬、釧路連隊区司令官名により役場經由で各々に通達があつた。

十一月一日、旭川輜重<sup>しちゆうへい</sup>兵第七連隊第一中隊に一月十日午前十時入隊すべし、と令状が届けられた。

昭和十一年一月十日、午前十時輜重隊一中隊に入隊。

#### 軍歴

昭和十一年五月 本部付少佐藤本滋雲当番兵

七月一日 一等兵に進級 精勳章授与

九月十日 師団特別大演習審判官

統管部師団兵器部長大須賀中佐当番兵

大須賀中佐伝令、今村の乗馬は輜重隊

より併馬にて連行、十月二十日まで無

事任務終了

第四期特務教育係助手を拜命

十二月一日 上等兵を拜命 精勳章を授与

昭和十二年三月一日 伍長勤務上等兵を拜命

昭和十二年度下士官候補生教育助教を拜命

五月一日 浦河港において工兵隊輜重隊

合同特殊訓練助教を拜命 教官野村見

習士官

参加者 甲種幹部候補生十六人 下士

候補十二人 七泊八日

七月七日 支那事変

第七師団動員下命輜重隊編成業務に服

す

八月二十日 歩兵第二十八連隊に配属を

命ず(伍長勤務上等兵)(下士官要員)

同日独立機関銃第六大隊に転属

市内啓明小学校内に本部設置編成(召

集)召集者受付開始二十二日召集者受

付完了 以前より編成していたとおり

三個中隊 各中隊に彈藥小隊を配屬

私は本部付大行李長特務兵四十五人、

乘馬は部隊長副官、軍医、獣医中隊長

三人、輜重隊班長三人、合計十一頭、

予備馬二頭、鞍馬各中隊十五人、大行

李三十五頭、五十八頭

馬係將校関口准尉、下士官今村上等兵

九月二日 旭川出發

九月六日 大阪港出港

九月九日 北支溘沽敵前上陸

十月一日 輜重兵伍長に任官

昭和十三年三月十日 北支寧晋城攻撃彈藥交付中迫

撃砲破片槍により両眼及び左膝上部右

手親指人差指第一第二関節裂傷により

野戦病院に入院

特に彈藥交付は激戦の中、生命を賭し

て働き、任務の責任を果たした事を感謝

すると部隊長が手を握り喜んで下さい

まして、私の内地送還をしないで現地

治療により早期部隊帰還の添書を書い

て下さいましたが、砲弾の破片が小さ

く数多く刺さり、意外に重傷で現地治

療は不可能と決定、内地送還大阪病院

に二カ月余入院した。

五月初め 旭川陸軍病院に転送

大阪陸軍病院長よりの添状により三年

間の召集免除により輜重隊に戻った

七月十五日 召集解除除隊致し根室に

帰った

昭和十四年—昭和十九年五月十日召集まで

釧路連隊区司令官の命令により補充兵

及び未教育者教育の日数二年以上とな

り軍曹に任ぜられた

七月四日 小樽港出港

七月九日午前十時五分 阿頼度島沖にて

国籍不明（アメリカ？）の潜水艦の魚

雷二発命中、太平丸に乗船中の輜重隊

二百八十人中百人戦死没者

柏原に上陸し五日後、先発分隊として一番戦死者の少ない(二人)今村分隊二十五人が占守島に渡り、旅団より貨物自動車十両を受領して、各島より私たち輜重隊に二年分の糧秣を分けてくれる分を船で運んで来るのを、長崎棧橋にて受領して兵舎に受け入れることになった。約二週間で受領が完了、本隊も柏原より占守島に進駐終わり九十一師団輜重となりまして島内の輸送に任じた。

昭和二十年初めより南方は次々と激戦激戦にて全滅である。兵隊たちは「親父さん、大丈夫ですか」「神風吹きますか」「吹くよ」と答えていた。負け戦だとは知らされないであろう。海岸沿いにM4型への備えとして壕掘り。無駄だと思いが致し方なし。

八月八日未明 「国端岬にソ連軍上陸、

警備隊と交戦中、輜重はすぐに長崎棧橋に急行し柏原港より占守島に渡る兵員、武器、弾薬の輸送に任ずべし」十日まで三日間交戦、夕方停戦、十二日武装解除。

八月十日 早朝木村部隊長柏原(司令部)に出張

午後四時、午後五時戦時武装にて本部前に集合と達示あり、各分隊長に告げる。

部隊長の報告と訓示、誰も声なし。皇居に向かい「捧げ銃」「立て銃」軍人最後の礼である。

午後六時各中隊より五人ずつ炊事に集合と達示。酒、甘味品、砂糖、餅米、小豆、煙草等を分配、将校も兵隊と平均にと告げた。

昭和二十一年一月一日 柏原港沖出港、大泊沖經由、一月二十日頃ナホトカ港に上陸

千人で第十大隊と言う。

私の分隊二十五人は、千歳台經由飛行場付近の十大隊小河原准尉の小隊に編成する。この小隊は速射砲部隊で教育の悪い兵隊ばかり。注意事項も守らないので、点呼の折に「お前たちは兵隊のくずだ」と言う。「生意気な事を言うな」。「誰だ、文句があるなら前に出て来い。いかに戦争に負けたとは言え、ソ連に負けたわけではない、天皇陛下の命によりアメリカに負けたんだ。我々は日本に帰るまでは日本の軍人だ、誇りがあるんだ。笑われるような事はするな」と言った。誰も文句言う者なしだった。後で私の分隊長が、「今村という奴、中々やるねえ、良い親父さんだ。酒、煙草はみな俺たちにくれる、もし足りない場合は炊事からもらって来てくれる」と言っていた。

その代わり炊事の薪は、全部私たちの分隊が輸送の帰り、海岸や山から木を積んで行った。

#### ソ連上陸

ナホトカ上陸後、近くの二キロくらい歩いたところにテントが三十くらいあり、一テントに三十人くらい入れる。五日くらいたったら千人の大隊がいつ出発したのか我々の小河原小隊だけになった。その後、汽車に乗り真っ暗になった。止めると歩哨が来る。小便、大便、やっと扉を開け「ベストラ」「ベストラ」貨車の陰で大便小便。外は寒いが貨車の中はビッシリ詰まってるので暖かい。何日たっただらうか、駅に着いた。「イマン」「ゴールドイマン」市だと言う。下車して歩き出した。子供たちが「ヤボン」「ホリヨ」と雪を投げってくる。四キロ地点だという橋を渡ったら一軒の建物あり、二段造りの収容所。以前ドイツの捕虜が収容されていたと、丸太の組合せ、ソ連の建物だ。ドラム缶のストーブ二個あり。執行軍医しぎょういさんが私の膝上部貫通創が冬になると痛むことを知っておられ、ス

トープの近くの二階にして下さったので助かった。

作業は私の分隊だけに橋の柱が流水で傷ついた部分の取替え工事を割当て、一つ取替え終わったら要領を覚えた。歩哨の曹長に隠してた腕時計二個の中の良い方をあげた。良い男だった。ノルマも九五〇——一〇〇%で、次から次へと橋の工事が進み、氷の解け始めまで遠くなったので車で往復する。橋材を切り薪にして積んで来て、收容所で皆に喜んでいただいた。

二十二年四月末、橋の工事も終わる頃、三時の休みの合図あり歩き出したところ、股の付け根、鞆丸の上部が引張るようになり、歩行困難。歩哨が走って来て私を背負い、トラックの助手席に乗せ「ラポートカシチャイ（労働、終わり）」「オワリ」「カイル」「カイル」と大声で言った。皆、早いが「カンチャイ」「カイル」と言うので、薪用に切ったのを持って、トラックに乗った。收容所に着いたらまた背負って部屋まで運んだ。軍医さん、ソ連の軍医（女医）少尉もズボンを下げた。皆「親父さん、昔悪い事したのが今出て来たんだよ」「その通り、男振り良いし」。軍医さんが

「今村さん、子供の頃脱腸した事がある」「私の兄弟では誰もありません」「寒さと冷えだね」。皆が「分隊長は氷の上に座り、柱にノミで切り込みしてるので冷えるはずですよ」と言う。

衛生兵が飯盒にお湯を沸かしてタオルを温めて、脱腸のところを温めてくれたので暫くして収まり楽になった。二、三日休んだら、倉庫で糧秣の配給を計算し、計量して渡す係をやるようになる。日本人の方には少しでも多く、ソ連の方には少なく計った。

突然午後より作業に出ていた全員帰って来た。健康診断する、と女医の中尉一人、少尉二人。随行してきたのが時計をあげた曹長である。

目で暫くというような合図をした。また、收容所の所長、中尉、男軍医も一番先に私を呼んだ。女医は、「尻に肉がある、倉庫係として暫く使える」と言い、「入院させなくても良い」とも言った。曹長は、「近く上層部と日本の医者が各收容所を見に来たら、これはどの脱腸を働かせているということは大変だよ、入院させることです」と言い、ついに了承された。栄養失

調者六人に心臓病患者、やせている者八人に私を加え、十五日入院と決定。私は分隊員を残して出るわけにはいかないと曹長に話していた。分隊員が聞き、「親父さん気持は分かるが入院して下さい」と皆で言ってくれた。最近少し動くと思が出て苦しい有様だったので入院することにした。

夕飯後、皆に見送られ、心残りだったが出発、病院には寄らず途中三泊してナホトカに到着。二年前とは違い大型テントが正しく並び町のように、綺麗に掃き清められていた。

夜、テントの中で、「皆様これからは精神との戦いです、一歩間違うと帰れませんよ。今村の指示に従い、少しでも他のテントより使役や達示の折に早く出て下さい、お願いします」。「分かりました」。これと言う言葉も無い。時折赤旗の歌、メーデーの歌。全然分らない事ばかりだが、話が終わると拍手。そのときは一番大きな拍手をした。また、山の下に萩の木があるので折って来て箒ほうきを五、六本作り、テントの周りや通路までも掃いた。見張りに来た役員と、「いつも

綺麗にしてくれますねえ」「私たちの居住所ですもの」「どこで終戦しました」「占守島です」「交戦部隊ですねえ」「はい」と話した。

印象が良かったのだろうか、私たちのテント番号が呼ばれた。

#### 舞鶴入港

昭和二十二年六月十一日、米山丸にて舞鶴に入港した。船中で同じテントの皆が私に抱きついて、「今村さん、私たちを助けてくれた大恩人です」と言い、一緒に帰れた喜びをわがちあつた。

しかし舞鶴で半日くらいずつ、三日間取調べをうけた。米兵と日本人の通訳と私の根気比べだった。

復員手続きの際、「百円札三枚に海軍兵の服に編上靴か運動靴か。運動靴に海軍の乾パン、北海道まで三日分とする」と言われ、私は「函館から根室まで二日かかりますよ」と五日分もらい、根室駅までの無賃乗車券と二十八人の代表者のカードを受け取った。駅員の案内で朝食の食事券を渡されるとき、煙草を受取る場合の責任者であった。

焼けた青森の町、函館に港駅で一泊。樺太より帰り函館港に三分の一が下船、毛ガニを食べて散らかしたホームを掃除したら、駅長さんに「貴方たちのような兵隊さんたちが復員したら日本の国も早く復興しますよ」と言われた。翌朝九時、釧路行きに乗車。一人また一人いなくなり、釧路に着いたら自分一人だった。

誕生日十日前に残して出征した長男が「とうさん」「雅男か」「うん」。五歳だった。後ろの妻の姿を見た。「お帰りなさい」「ありがとう」と感謝の頭下げて「ご苦労さんはお前の方だっただろう」と言った。

夜九時過ぎ終列車で帰郷、町立病院の先生一人、看護婦さん二人が駅長室に迎え入れ、「ご苦労様でした、どこが悪いのですか」「脱腸で先に帰されました。まだ、盲腸も二回散らしましたので早い折に手術していただきます」「明日にでも病院に来られて診察された方が良いでしょう」と言って帰られた。

駅前に馬車に座蒲団を並べての迎えであった。弱い者よりソ連は先に帰すと言うので、弱って帰されたと思われ、馬車での出迎えだった。

三分の一以上焼失した根室の町は真っ暗だった。近所の方々、親戚一同、私が元気で帰り、太っていたので皆驚いていた。翌日金刀比羅神社に三人で、無事に帰ったお礼に参拝。前田宮司より無事帰還のお喜びの言葉を賜りました。

歯舞漁協根室支所に第一に挨拶に行った。まだ帰りぬ職員二人おり、皆で帰りを祈願してますという。ありがたい事に、六日後、漁協に復職、軍よりもらったトヨタの貨物車の車両係を拜命する。ガソリン不足で木炭ガス装置を取付け、苦労した。

一年勤務した若い職員に「今村さん、ソ連帰りで頭が古く堅い」と言われたので辞職して、姉の嫁ぎ先、初田牛の浜に赴き、半年後独立した。

北前漁の道具も見よう見まねで造った。

七月から十一月まで昆布採り、十二月から六月まで北前漁の繰り返し。ランブ生活十四年だった。

落石漁協より「漁師をやる人でない、漁協の職員になれ」と呼び掛けもあった。そのとき歯舞漁協からも「戻って来るように、子供たちも学校だろう」と言わ



れた。意を決して齒舞漁協に復職。花咲魚市場加工部（缶詰工場）（冷凍工場）担当後、事業部昆布の小袋詰め製造を一番初めに担当し、現在の大事業の基礎を作った。

定年六十歳制度ができてから六十七歳まで臨時職員と好待遇にて勤務させていただいた。

更にもう二年と言われたが、余りにも虫が好い事であり、辞退させていただいた。

在職中、昭和五十三年小樽市にて、占守島にて終戦となった速射砲連一中隊の戦友会が催された。その折に私の分隊もソ連抑留者も一緒というので招待があり、出席した。その折に幹事長が小泉忠弘様でした。

参加者に抑留補償について説明があり、後日「全抑協道連」となりました。創立が小樽で、この会が始まりで小樽が一番、二番は根室で、三番は函館です。瀬川会長を支えた矢島様とは共に連絡を取り、会員の増加で函館は一番多い、約八百人です。根室支部は郡部四町も加入させますと言ったら、「今村の大砲野郎」と言われましたが、二百三十人ほどに会員も増えまし

た。

全抑協北海道連合会の創立には、根室支部の田村副支部長と共に今村も事務局長として参加、慰霊碑建立委員として呼び掛けあり、微力ながら寄付集めに協力しました。

立派な碑が完成、生きて還った者としての務めでしょう。

## 戦闘とシベリア抑留

岩手県 佐々木 清 三

昭和二十（一九四五）年七月、ソ満国境の緊迫した情報が乱れ飛ぶ中、真夏の太陽の光を受け暑い盛りに、五叉溝の三角兵舎よりい地区三里岳に、移動天幕生活をしながら対ソ戦に備えての陣地構築作業であった。草原は花咲き乱れ、我々を慰めてくれて毎日楽しい生活であった。

八月九日、青空の澄みきった良い天気朝、点呼を